



岩崎の貝化石は語る

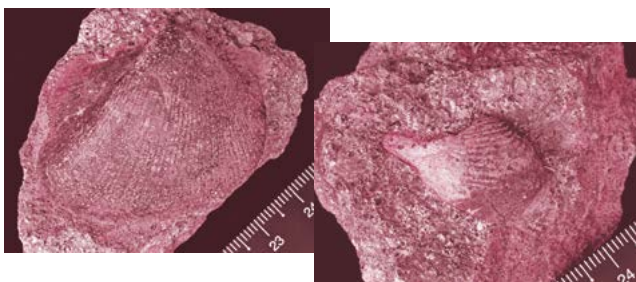
「道の駅 常陸大宮～かわプラザ～」のある岩崎は、久慈川が大きく蛇行する独特で珍しい地形を示しているのが特徴です。その主な基盤は、1,600万年前頃の新生代新第三紀中新世に堆積した玉川層の岩石で形成されています。

1994年に市内東野の玉川層から、茨城県内で初めて、熱帯性の環境を示すヨコヤマビカリアやカケハタアカガイ化石からなるウミニナ - フネガイ群集の存在が報告され、この時代の常陸大宮地域は、汽水から浅海域の“熱帯の海洋気候環境下”にあったことが明らかになりました。

近年、岩崎に分布する玉川層から、東野地域からは産出が認められていないうえに、全国的にも産出が非常に稀な貝類化石が発見されています。そこで、環境や進化などを知るうえで特に重要な貝類化石を紹介します。

《トヤマヌノメアカガイ》絶滅した二枚貝化石です。岩崎の化石は、東北日本の太平洋側では初めての記録です。それまでの産出記録は岐阜県、石川県、富山県、和歌山県、兵庫県だけでした。現在生きている（現生種）仲間のヌノメアカガイは、房総半島以南から西太平洋の水深10～200mの海底に棲息しています。

《オオシャクシガイ》二枚貝類で化石種と現生種がいます。しかし、1,600万年前頃の化石種の記録は、岩崎と兵庫県の2例を数えるだけです。現生種が、房総半島から九州の水深100～200mと佐渡島沖の水深275mの海底に棲息することから、時代とともに浅海から深海へと棲息環境を変えたことを示す大変珍しい化石です。



左上：写真1. トヤマヌノメアカガイ
右下：写真2. オオシャクシガイ

《スナコザカガキ》絶滅した二枚貝のカキ類化石です。岩崎と石川県金沢市の「砂子坂層」から産出が知られているだけの、不明な点の多い化石です。しかし、未解決な問題は残されていますが、殻の特徴が大変似ているカキ類が現在の沖縄県石垣島に棲息しています。この状況から、スナコザカガキは1,600万年前頃の熱帯の環境に棲息していたが、寒冷化や大地の変化が原因で本州海域では絶滅し、その子孫が現在の亜熱帯～熱帯で棲息していると考えられます。

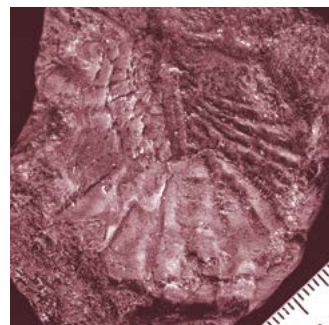


写真3. スナコザカガキ

《マツオクマサカガイ》絶滅した巻貝化石です。岩崎と石川県金沢市の「砂子坂層」から産出が知られています。この貝の特徴は、殻に二枚貝、巻貝、礫や軽石などを付けながら成長するということです。岩崎の化石は軽石を付けています。現生のクマサカガイ類は、本州中部以南からフィリピンの水深30～500mに棲息しています。

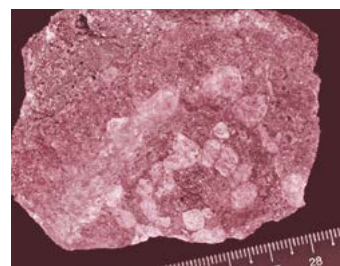


写真4. マツオクマサカガイ

現在の環境からは“にわか信じがたい”ことかも知れませんが、紹介しました化石からだけでも、太古の常陸大宮地域が熱帯の海洋環境にあったこと、大変珍しい化石が産出すること、その化石が棲息環境を変えて進化したことなど、大地、環境、生物の歴史を知ることができます。常陸大宮地域の地下には、貴重で興味深い地球の歴史が沢山秘められています。詳しくは『常陸大宮市史 別編2 自然』をご覧ください。

(常陸大宮市史編さん委員会 専門調査員 理学博士 菊池芳文)

■問い合わせ■

文化スポーツ課

文化振興グループ ☎52-1111(内線343)